Dhruvāśvakalpa

——グリヒヤ祭式研究 III——

高　橋　明

本論は Śravaṇā (印仏研 XXVII-1), Āśvayujī (ibid. XXVIII-2) につづき，グリヒヤ(G.)季節祭のひとつ Dhruvāśvakalpa の儀軌一覧を提出することを目的としている。M. 及び K. に見られるこの祭の儀軌全てを項目化し[1]，それらを同項目はまとめつつ列挙し出所を示すことにより，比較すべき要素を確定し，祭式の骨格を示そうとするものである。しかる後，中世文献中にありながらこの祭との類似・共通性が指摘されている Nīrājana[2] との比較にも紙面がゆるす限りふれ，両者が類同の（本来同一のものだが時を経ているためそれ自身変遷していた）習俗[3]を素材としていると考えられるその関係を明かにしていきたい。以下，項目ごとに若干の説明を加えていくこととする。

1. 名称　M. は Dhruvāśvakalpa と呼んでいる。——M. II. 6. 1.——Dresden は前掲注でこの語義を詮索しているが，これは 'kāmyam idam.....kāmaś cā'śvānāṃ dhruvatvaṃ dhruvāśvam iti' とある注のとうり，馬たちの堅固・息災を願う祭の意にとっておくのが適当と考える。

2. 日時　Āśvayuja 月（9月）の満月の日——M. II. 6. 2; K. 57. 1——日没前から始める。——M. II. 6. 4. ——comp. 注 2. 2.

3. 対象　この祭個有の儀礼 (7-11) の対象となるのは馬たちである。——M. II. 6. 5; K. 57. 1——K. はこれに 'sarvāṇi vāhanāni' を加えている (ibid.)。これを象等軍用獣と考え武人の祭の俤 (infra. 9) に見るか，ロバ等通常の Gṛhastha 所有の駄獣と考えるかは決し難い。むしろそれぞれの階層が所有する家畜に応じた祭を行うよう規定したと考えるべきか。

4. 執祭者　ṛtvij ——M. II. 6. 3. ——comp. 注 2. 4.

5. 祭場等の準備

a 祭場——M. II. 6. 4; K. 57. 2. ——村の北方 (M., K.) あるいは東方 (M.) の地を選ぶ。——M. はさらに，「Aśvattha あるいは Nyagrodha 樹の下に[4]，あるいは水の近くに」祭陣を設けるよう規定。——comp. 注 2. 5. a. i.

b. 祭陣　特殊な paridhi（祭陣囲い）を作り[5]，四方に水瓶・穀種を入れたも

のを配置する。——M. II. 6. 4; K. 57. 2. ——comp. 注 2. 5. a. ii, iii; b. i.

c. 用意するもの　供物となる食物: apūpa, 炒米・麦, 油揚菓子, めでたい果実, 籾米・麦, 凝乳, 蜜, 雑穀菓子。荘厳等に用いるもの: 諸香料, 諸味水, 諸草, 宝珠, 飾り紐。及び敷草[6]。——M. II. 6. 4. ——comp. 注 2. 5. b. iii.

d. 祭火　村の家から運んでくる。——M. II. 6. 4. ——祭陣の西側に設置する。——K. 57. 3.

e. 祭官の潔斎　——M. II. 6. 3.

6. 焼供　グリヒヤ祭式の通例にしたがい, まず焼供が行われるが, 規定が簡略であり, マントラ (m.) が神格名に svāhā を付したものに限られている点は新作たることを窺わせる。(他の祭式と共通に用いられる jaya は別)

a. 焚木をくべる儀　Aśvattha, Palāśa, Khadira, Rohitaka, Udumbara のいずれかを用いる。——M. II. 6. 4. ——comp. 注 2. 5. b. iv.

b. 次第は通常の型による　穀物調理・獣供の型により。——M. II. 6. 4. ——穀物調理供の型により。——K. 57. 3.

c. 主供　穀物調理・獣供により 3 回, Ucchaiḥśravas, Varuṇa, Viṣṇu に。——M. II. 6. 4. ——〔酥油供により〕Varuṇa, Agni, Aśvin, Āśvayujī, 三神！に。——K. 57. 3. ——comp. 注 2. 7. a.

d. 特別酥油供　Jaya 供[7]: 主供前に。——K. 57. 3. ——主供後個有の儀礼の直前に。——M. II. 6. 5.

7. 馬たちの沐浴　M. S. II. 7. 13; 131; III. 11. 10; 16. 5 により水を聖別し沐浴[8]。M. II. 6. 5——K. は 57. 1. への Devapāla 注をとる。(荘厳を行う前提として沐浴は当然予想される。) comp. 注 2. 7. b, d.

8. 馬たちの荘厳　香料・花環・飾り紐により。——M. II. 6. 6. ——供物が捧げられている間に〔鞍飾り等を〕つける。——K. 57. 4. ——comp. 注 2. 7. b, d.

9. 馬たちに三回祭場を右遶させる　——M. II. 6. 6. ——〔馬に乗り〕鎧を着け (kavacinaḥ)。——K. 57. 5. ——武人の祭の俤をつたえる一語である。

10. 馬たちにいななかせる　——M. II. 6. 7; K. 57. 6. ——行作の位置関係を参照するとこれは前兆占の変形と考えられ, 吉兆を得んとする儀礼と考えられる。——comp. 注 2. 7. c.

11. 祭の後の行進　——M. II. 6. 8; K. 57. 7.——comp. 注 2. 7. f.

12. ダクシナー　牝牛と牡牛。——M. II. 6. 9——K. は, 牝牛, 衣, 真鍮製容器 (水瓶), 黄金 (祭匙?), 諸味水, 布 (paridhi の?)。——K. 57. 8•9.

1) Mānavagṛhyasūtra (M.): [Ed.] GOS. 85, with the comm. of Aṣṭāvakra. Baroda 1926. —— [Tr.] M. J. Dresden. Groningen 1941; Kāṭhaka-G. S. (K.): [Ed.] W. Caland, with extracts from three comm. Lahore 1925. M. 及び K. の該当箇所を同一の祭式の規定と見るべきことはつとに Dresden 前掲書訳注 (p. 128) に指摘されているが, Gopal の India of Vedic Kalpasūtras (Delhi 1959) はこの指摘を怠つている。(pp. 408-9) また Dresden は M. 及び K. の比較すべき箇所をスートラ区分単位で指摘しているが, これは M. のスートラ区分が冗長すぎるため分明とはいえない。また祭式研究の基礎とするためには, それぞれの行作・細目の祭式全体の中での位置を明らかにした項目として抽出・確定したうえでの比較でなければならないと考える。

2) Dresden, loc. cit. Nīrājana は Bṛhatsaṃhitā (Bṛh. S. [Ed.] A. V. Tripāṭhī, with the comm. of Bhaṭṭotpala. Vanarsi 1968) 43 に儀軌の典型を見ることができる武人階級の祭であり, この例も含め中世の諸文献には王が実際戦場に赴く際の出陣の祭として現れる場合が多い。その場合も戦闘にふさわしい季節が Āśvayuja・Kārttika とされるため, この季節との関係は緊密であり, 季節祭として規定する例も存する。(Sharma, B. N.: Festivals of India. Delhi 1978. p. 32) さらにこの祭の内容は現代の Dasara・Navarātra と呼ばれる同季の祭に受けつがれている。(Mitra Śastri, A.: India as seen in the Bṛhatsaṃhitā of Varāhamihira. Delhi 1969. p. 80.) この祭は Durgā が Mahiṣa に, Rāma が Rāvaṇa に勝利した日とされ, 軍の祝典を中心に, 馬の沐浴・荘厳を習俗としてつたえている。(Dubois: Hindu Manners Customs and Ceremonies. London 1906. p. 569; Crooke: The Popular Religion and Folklore of North India. Delhi 1896. p. 208.)

ここで Bṛh. S. の儀軌を項目化しておく。([ ] 内は注釈による。) **1. 名称** Nīrājana. (1) **2. 日時** **a** 雨期に行つてはならない。(1) **b** Āśvayuja あるいは Kārttika の白月 8, 12, 15 日より (2) 8 日間。(6, 8) **3. 対象** 馬たち, (5) 王・象・軍。(20) **4. 執祭者** purohita. (14) **5. 祭場の準備** **a.** 初日に, i) 村・町の北東の地を選び, ii) 木製のアーチを作り(3), iii) 木の枝とクシヤ草で仮祭屋を作る。(4) **b.** 8 日目。i) アーチの南側・祭陣の東側に北面し, クシヤ草と布で遮蔽された祭火を設置。(8) ii) 祭陣は或星供式に, (14) iii) 用意すべきもの: 様々な香料, 顔料, 花, 食物 [modaka-lopikā'pūpādi], madhu-pāyasa-yāvaka. (9-11) iv) 焚木は Khadira, Palāśa, Udumbara, Kāśmalī, Aśvattha のうちの一, v) 祭匙は金・銀製。(12) **6. 七日間の浄鎮祭** **a.** 初日, 馬たちに豆・稲等を

結んだ紐をかける。(5) **b**. 七日間，仮祭屋で多くのマントラ（m.）により〔浄化バター供を行つた後，供応儀礼を行う。〕(6) **c**. 馬・象を好遇し祭り・はやす。(7) **7. 八日目の祭り. a**. 王・馬飼長臨席のもとに〔焼供〕。(13) **b**. 馬・象を灌頂・沐浴，白布・香料・花環・香で供養。**c**. 前兆占 i) 馬をアーチに連れて行き，馬の動作による前兆占。(17, 18) ii) m. で聖列した団子を馬が食すか否かによる前兆占。(19) **d**.〔nīrājana の儀〕水瓶の水に Udumbara の枝をつけ，m. により馬等に触れる 。(20) **e**. 敵軍調伏の呪術。(21) **f**. 行進敵地に向け行軍。(22–28)。(（ ）内は Brh. S. 43 中の verse の番号)

3) 18種の G. S. のうち M. 及びその影響下に成立した K. のみに儀軌が存することは，K. のテキストの一貫性により後代混入説をとり難い以上，通常の G. S. 伝承とは異る習俗を G. 祭式化したという視点を要求している。中世文献に関しては，精致な儀軌を規定する例は極少ない反面，多くの文学作品に説明ぬきで用いられている事情がこれをしめしている。また Arthaśāstra II. 30・32 の例はこれが様々な機会に行われるいくつかの変種の総称であることをしめしている。

4) 共に śikhandin（頂髻を有する）と呼ばれ，共通の形姿をしめす。Aśvattha は点火錐に用いられ，第三天にあつて神々の座所とされ聖性を認められる樹の一つである。(Macdonell・Keith: Vedic Index. I, p. 44.) この神々の座という観念が，M. が馬の沐浴に際し用いる m. に見られることが注目される。infra. 注 (8)。

5)「祭陣の形を描き，四隅に樹の枝を立て，旗を結びつけ，紐を渡し香料と花環を結び」(M.)「祭陣をしつらえ，樹の枝と新品の布により囲い」(K.)

6) apūpa-srastara-lājā-ullopika-maṅgalaphala-akṣata-sarvagandha-sarvarasa-sarvauṣadhi-ratna-pratisara-dadhi-madhu-modaka-nandyāvartta.

7) 様々な祭で用いられる追加酥油供。M. は I. 10. 11 に全文与えられている m. を，K. は Mantrādhyāya (Caland, op. cit. p. 291) に与えられる m. を用いる。

8)「太古に，神々より三代以前に，生じたる薬草，……アシュヴァッタ樹（菩提樹）のもとに汝らの座所はあり，……精力を与うるもの，雄力を増すもの，……」M. S. II. 7. 13≒RV. 10. 97.（辻直四郎：リグヴェーダ讃歌 p. 359）「……清浄にして（他を）清める者なる，……さまざまな姿の水たちの，我らに祝福あれ，柔和でありたまえ，……」M. S. II. 13. 1.「ソーマに座せる父霊たちの我を浄めたまえ。……百（歳）の寿命の浄化具もて，天寿を全せんがため。……」M. S. III. 11. 10. これら4 sūkta は，Antarkalpa (M. I. 5. 5) Aśvamedhadīkṣā (I. 23. 18) で沐浴用に用いられている m. の類同行作への転用である。（早稲田大学大学院）